

ごで採れたサルケな。火だばすぐつく。(柴田の人が採ったヤチというのは) 向ごだね。あの今の穂並小学校だが、あのむごだね。もと向ごう(県道186号線沿い北西方向、つがる市斎場方面。写真)。こちにもあたばて、ほとんど向ごうばり。」「こごだりだばねや。こだりでもぜーんぶあるだ。下。イズメートルも掘れば。全部ある。」

▼このあたりの田はひどくぬかるといことはなかったが、金森方面は腰切り田で田植えに苦労したという。湿田の下は根が張っていて、その下は底なしの状態だという。表土からサラケまでの層が薄い場合を「サラケが近い」と表現した。——「おなごど田植えやて下サルケだどごで腰切りはた人でな。話は聞だごどある。」「平田のあこだば(柴田金森方面。B氏の家からは南東方向)、ぬがり田な、あこだばホントにサラケちけどごでや、女の人こ田植えやるに大変であつたらし(笑)。(自分たちの田んぼは)それほどぬがねね。あんどクカグセイリしたづぎむごさ行つたずブル埋まてまてなもぬぐひてまたでばな。そごなしみてたもんだものすき。」「ただ根つながらるばりだどごで根切れば底なしや。」

入手法 ▼主として自家用に採取した。売買の話は聞いたことがない。——「山だば(サルケが)ねえどごですき。このあだり、それでも、あづのほち売たでねな。ヤヅ、だれもの、きだごとあねあ。売ってる人だあても、買ってる人だああるなものな。」「(売り買いの話は)聞だごどあねな。だいたいなも、売るだけだば切ねだね。じぶでエで焚ぐだけ。切てるどごですあ。」

採取の目的 ▼燃料とするためであったと考えている。——「(採る目的は)燃料。燃料しかねべおな。それしか燃料ねどごでな。」

採取の時期・場所・主体 ▼屋敷地のそばや、湿地から採取した。B氏は20代前半にA氏の父のサルケ切りを手伝った。A氏も中学生のころ手伝った。つまり、サルケを切る作業は一家のあるじと、若い男性が中心になっておこなった。

採取法 ▼柄の長いテンズキで垂直に幅40cm、深さ40cm、1枚の厚さ15cmほどの切り込みを入れた。3回切り込むと、3枚分の切れ目が入った。次に、柄の短いテンズキで、切り込みの根元に向けて真横から切り込んだ。3枚分を切り込むので、1枚が15cmだとすると奥行きは45cmになる。つまり、幅40cm、高さ40cm、奥行き45cmの正方形のブロック状のサルケができあがる(図3)。これを、水中でスーッと転がすように浮力を利用して持ち上げて、陸上に上げた。仮に1枚ずつ陸に上げるならば、軽すぎてサルケが水の中で流れて行ってしまふことや、薄いために形が崩れやすいことなどのデメリットがあった。それを解消するための工夫である。また、テンズキは刃の中心を支点として左右に柄を振るようにより、余分な泥がつかずにきれいに切れた。「技術がいることだ」とB氏は語る。

もうひとつ、サルケを切る道具として「カマ」が用いられた。特別の名称はなく、単に「カマ」といった。このカマは、テンズキで掘り上げたサルケが、その性質上、欠けやすく、いびつになりやすいので、きれいに切るために用いた。つまり、整形用である。通常のカマと異なり、表裏がなく刃がまっすぐであるために、サルケの断面を美しく切り取ることができた。カマは手前に引きながら、上下に弧を描くように動かしながら切った。そうしないと、サルケが崩れてしまった。当時、このあたりの人々は、みなこのサルケのカマを用いていたという。このカマを含め、農具は木造のヤダカンジ(加福鉄工所)で作ってもらった。ヤダカンジの製品には「㊦」の印がついていた(写真)。——「それで使いがだ、使ってるず見でるわけ。これさあ、これ(長い柄のついたテンズキ)はタデ。タデにずこう、置ぐわけ。このなげんずの。ずーっと一回刺せば、三枚が四枚、だいたい40センチまきこ(40cm角)だどもってるわけ。厚さも、厚さは、15センチぐれなるべが20センチ、20ぐれえあべが。でこれ(柄の長いほう)はタデのづ。これはこだ、タデず深ぐやれば、してこんだ、40センチだ40センチこうなるでばな、へば、これこだヨゴがらこだ刺すわけや。ヨゴ刺して、で、浮ぎあげで、して、これ切てる場所て水たげいべ入ってるわけ。そのみんず利用して、水さ浮がへで、で、カマあ、カマ。こ切つたんずこう、なげんずいだでばな。3枚だ



かつてサラケの薈が広がっていた(つがる市斎場方面)

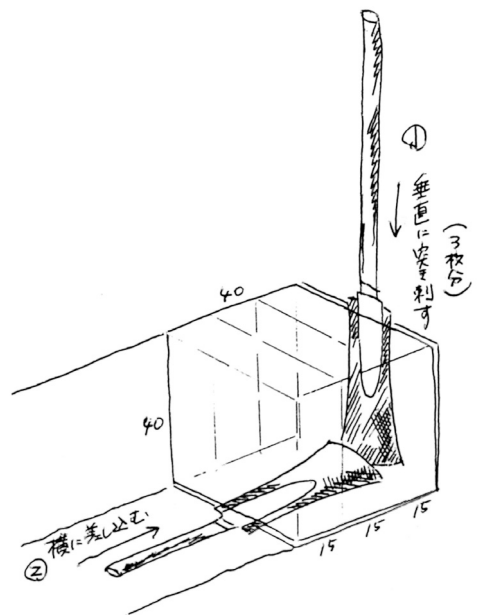


図3

このあたりの人々は、みなこのサルケのカマを用いていたという。このカマを含め、農具は木造のヤダカンジ(加福鉄工所)で作ってもらった。ヤダカンジの製品には「㊦」の印がついていた(写真)。——「それで使いがだ、使ってるず見でるわけ。これさあ、これ(長い柄のついたテンズキ)はタデ。タデにずこう、置ぐわけ。このなげんずの。ずーっと一回刺せば、三枚が四枚、だいたい40センチまきこ(40cm角)だどもってるわけ。厚さも、厚さは、15センチぐれなるべが20センチ、20ぐれえあべが。でこれ(柄の長いほう)はタデのづ。これはこだ、タデず深ぐやれば、してこんだ、40センチだ40センチこうなるでばな、へば、これこだヨゴがらこだ刺すわけや。ヨゴ刺して、で、浮ぎあげで、して、これ切てる場所て水たげいべ入ってるわけ。そのみんず利用して、水さ浮がへで、で、カマあ、カマ。こ切つたんずこう、なげんずいだでばな。3枚だ



ヤダカンジの印

あ3枚切るつきゃ。そへばさ、カマがこうシカグになるべえ。ましかぐだんでねえたんだこう、草の根つんだが欠げだりすわけや。それこうシカグに取るにつかた。してこどうなげんず、カマで切ったりすわけ。さまざまに使ってるんだ。（テンズギを刺して）切つてあどぎがらいつつにその厚さで、タデで傷たでで（最初から15cmの厚さにテンズギを刺して切れ目を入れて）。うん。たんで、こう3本にタデにこう切るべ。ひやふとつづつごしおで。1回にやれば割れでまるどごで（切れ目を3回入れて1ブロックH40cm×W40cm×D45(15+15+15)cmの形で）。へで水にこうシーっとう転がしてよごして、それへや水入てでうえるつきゃ、浮ぐどごで。それこだこれ使つたり、カマでこうこさ、切る。ふとつ（1枚分）でもやたりすば

てや、一回にやれば、水さはてどごで（浮力があって軽いために）、ううずゆ流れで、ハハハハ（笑）。だんでさ、これこんだ使つても、ドロぐだのなだかだくつづきゃ。だ水さ一旦へで、へで、こう刺して、こして（刃先の中心を支点に柄を左右に振るように）動がして。そしてこうあお、起ごすわけ。こしねんでさ、傷たつてあこういたつて、こういつてさ（左右に振るようにして切ることによって）、へあくつがねえわけ。水さ浸けでおげば。んでもくつで（くつついて）これとらいねぐなつてまる。げじゅつ（技術）要るのよ。やる人つて（笑）。てこだよたごとなげ、こうやつてもこだ曲がつたりすでばな。それが技術だわけ（笑）。ただそれだけのごどや。」「（道具の名前は）なんてしたこれあ（笑）、テンズギ、であねたな、何てつけであたけな。なめわがねろう。わも、わしでまたあ。何だかテンズギだがて聞いだごどある。（カマは）カマはカマだごてあ。これしたんですあ、カマでも、こてましぐだきゃ。ふつのだあこれこしてこう刃つけで。これまっすぐでねば、まっすぐに切らいねわけや。こう斜めにいてまるわけや。たんでこれみなこうひら、ウラオモデ同じだわけや。おそらぐ（このあたりのカジヤで）作らへだべおん。みなそのときこれきりつかてあつたもの。キヅクリ今の旧マヂにあつたんだ。カフグ鉄工所て。あたね。たんで、冗談してすあ、カマ、カマ、でぎあいだねぐ、作らへるわけや。カマでも、ナダでも、へあこだ、なんむたこう取引してるとごですあ、わじゃにこだ、いづば切れるカマでねぐ、いづば切れねえカマ作つててすあ、冗談してさ（笑）。笑つて笑て。ナダでもみな、これ、つくらへだもだね。クワでもみな。全部。カマでもこれみなつじゅだね（加福鉄工所の刻印がついたナダ）。ヤダヤダつてな。ヤダカンジヤダカンジつてな。ヤダ、なにあだ名てへばいだな、ヤダカジつて、鍛冶づごどさ。鍛冶。（ヤダとは）なんだもだがさな（笑）。」「（このあたりでは、サルケ用の）カマつかてあなたな。うん。たげつかてあたんた。だまて見でればや、見で面白れもんだ。ワラハンドずながらもや（子どもながらもよくみているものですよ）、こうなげず（こう長いテンズギで）こう切るべひゃ、このなげずこう倒すだいな。へば倒すめにこのみじけず（短いテンズギで）下切てるおんでしさ、あーつと倒へばや、水いっばいバツつこう浮ぐべ。ひゃこの傷こつた、だいたい、ごじだごじ（50なら50）、こうみゃ、み、みもりつけぢゅだでばな。これこだカマもてやむた慣えぢゅふとあるきゃ、まっすぐに[まっすぐに、の部分]は特に感情を込めた表現切てぐの。まっすぐに。ワエやればどてもまがてまるだでばな（写真）。こうつてさ。こうシカグだつてえべ、これさ、カマつて刃物つて、たんだおつけで切れるもんでねえの。引がねば切れねずや。引がねば。たんでこれこつてすすあ、上下に（動かしなが



「上下に動かしながらいいて切るんだ」（B氏）

引いて）こえてすき切つて、そしてやるつきゃ。これしたんでえ、手前のほうがらいぐてば、これサラケだてへば、こう切つてこう段々にこう、その人の使いがだで、ギョッどいぐでねだね。素直にこうすすあ、切ていぐわけ。（手前に弧を描くように）そしていがねば、この先さサルケが崩れでまるわけさ。そすて切つてるだ。これ技術いるだよ。ただ刃物どハサミど使い方つてしだ、ホントだだ。ムガシの人よぐしゃべたもんだね。ハサミど人どつかいがだだつてな。」

乾燥・運搬・保管 ▼水から引き上げたサルケを、フォークで刺して、ブロックの間隔を少しあけるようにレンガ積みにした。また、ハの字に立てかけた一方の側に将棋倒しのように連続して斜めに立てかけていく方法もあった。乾燥すると、大きさは半分ほどになった。それを5枚ずつナワで縛り、馬車に積んで家まで運んだ。軒下ではなく、小屋の中に積んで保管した。一冬分の量は、家族が多ければ消費量も多く、少なければ少なかったといい、どれくらい必要であったかは覚えていない。——「（A氏の父親が）切つたんずあ（私は）見てるだけ。切つたんずあこんだ上さ上げるきさ上げるでばの。へば、（例えば現在でも）ブロック積んでるべ、ブロック積んでる（ように）その上げ

だんず水上げるわけ。それ（例えば）ブロック積んでれば、これ交互に積んでるつきゃ。そして脇さ、ずーっと重ねで、そへば乾ぐわけ。それムガシみなこのサルケで切たもんだのさ。それこだ乾げば、ナワで5枚ずづ。縛って。で、ムガシ馬かてらきゃ。馬さ荷車さ積んで。（乾燥させるときは）ブロックどふとつや。間こちよっと開げで、風としいぐなねあまねきゃ。（ブロックのように積む場合のほか、将棋倒しのように次々と斜めに立てかけて）そいてやるふともあだね。将棋だけにな。コマだけにな。うん。やるふともある。最初はハの字みてにしてな。て全部こう（次々と斜めに立てかけて）。（そして、掘り上げて）すぐ。すぐ重ねでこず。うん。そのまま上げで。（サルケを重ねるために運ぶのは）ホック（フォーク）でもやたばてや、ちょっとアレ（記憶が不確か）だばって、何だあ何てやったばりや、配ったねな。ホックで刺してやったごどもあだ。ホックで刺してな。うん。刺して。そして持ってって。すぐそばさ積むだ。（他に使った道具は）あどそのどぎだつきゃそのそれだけであ。ひゃあどこだ乾げあその切たそれが半分なてまね。半分ぐれえなてまるね。乾げば。エさ持て来ればさ、クズヤネのちちやいのこういぺあたきゃ。その当時てば3つも4つもあたはんでさ。それさ乾げば、みなそちやじーっとまいでおいだの。今マジおぐようにして。（軒下ではなく）ヤのながさ。乾いでまればナガさ入れてまるんだ。うん。場所あればの。（一冬分の量は）家族よげだばや、つかるしな。家族ねふとばよげえたがねえそれまで分がねなあ（笑）。まず半分なてまるだ乾げば。まず草の根つづまったえんたもんだねな。」

用途 サルケはロブツ（炉）で焚き、飯炊きも汁物も煮物の調理もツルナベをカギノハナに吊し、サルケの火を用いておこなった。柴田周辺ではみなそうしていたという。その後、サルケを用いなくなった頃には、山へ行ってマキ（杉の枝）を拾って束ね、馬で運んできて燃料にした。マキのない人は、ワラ束を用いた。同じころ、レンガ造りの2穴カマドをしつらえた。一方の穴はツバガマを載せて炊飯に用いた。煙の排出口がついていたが、煙突を設置していなかったの、煙は屋内に排出された。その後、マキストーブを用いるようになった。暖房用燃料として灯油が一般的になったころ、カマドを使わなくなったので外での煮炊きに用いるようになった。30歳近くなるころ、つまり昭和30年代末ころには、村に電気釜が普及し始めたが、持っている人は多くなかった。——「むがしこうロブヂあたきゃ。ロブツ焚いで。（暖房と）うん。（他には）ムガシにしゃべればあの、冬煙だしてクズヤネごと虫な。虫よげになて。（他に）おめだのあだりだば、鯛の、アレつけでらアレ作ってして、フックつけで、ナベかけで、（ご飯だのオツユだの）もどはな。サゲもな。そのあどこんどすすあ、レンガみたづこう作て、流しのどごだのさ、つくて、置く場所穴二つつくてさ。そさ並べで。（その前は）ロブツであただよ。オツユやるのも、サガナ煮るにも、みななげづみだだ。ガシ（ガス）あるわけでねし、セギユ、トユ（灯油）あるわけでねし。うちのあだりだきゃだんで、アレだだだ。やし（き）、土地の、そご掘って1メータもあればサルケ出でくるだね。それ掘て煮だり炊いだりしたもだね。こあだりだきゃみな焚いだだ。それごそムガシの人はこのあだりさ山ねきゃ、山ねばこれ山のほちやいてや、杉の枝払ったんだね。それみなまさ積んできて焚いだもんだね。サルケ焚がねぐなたきゃ。柴みたづまあぐと、行ってふあらって、束ねで、エさ来て、へてこんだ切って、焚いだもんだ。（マキになった頃からカマドも使うようになり、レンガのカマドの2つ穴には）飯どおつゆどいれで。してこだアブラでるようになったどごで、カマえさおげば邪魔だどごで、オモデでやたりしたもんだ。うん。アブラど違て煙出るしさ。（煙突は）ついでねえ。ただぬげるとごあるだけ。カマドの次マギストーブ。そのめ（前）はさ、マギねふとだば、稲ワラでやたもんだ。ワラ焚いで。稲ワラで焚いだもんだ。（マギストーブの次は）デンキガマ。その前だあマジたいであったづぎだばすさ、ツバガマては。フタこうあづフタしたもだね。（レンガのカマドになってからマギストーブになったのもの）したて小学校時代だ。（その間は）ナンボもちがわねだ。（デンキガマは）何年だったべそれだば、何十代だべえ。電気てばはえひとで、わだち30で近く、でねがな。それでも、シュウラグで、何件でもな（集落で、何件でもない）。」

操作 ▼大きなロブツの中に、小割りにしたサルケを盛り、その中に山から拾ってきた杉の葉を入れて、トツケギ（柁に硫黄のついたもの）で着火した。トツケギは1cmほどの幅に割って使った。サルケには容易に火がついた。以前、屏風山方面で火災があったが、なかなか鎮火しなかったのは、サルケは火持ちがよいということを示す例だとB氏は考えている。また、サルケは地震の揺れを抑えると考えている。——「山がらすすあ、杉の葉ばって、杉の葉、とって、もどだばマツ（隣寸）てな。マサ（柁）みたんずあてたきゃ。アレで火つけですすあ、『トツケギ』てしたもんだね。アレ硫黄みてんたもんだべ、あのアレやあ、マツでもシュッてなんさがやればつぐきゃ。あいたもんだね。すぐつぐだね。それすさ、いちめえでねぐ折って、こへてつけだわけ。うすうすな（とても薄いです）。ムガシ柁屋根てあたべ、あれのよに薄い。その、トツケギだがなんだがって、うにきたもんだいな。それ買ってすさ、やたものや。幅これぐれだべな、1cmぐらいに折って。アレなんだ、木みてたのさこして（擦って）やった（発火させた）んたあ。アレばりこして火つけだんでねんたいな。サルケ、その前にすさ、重ねで火つけるようにして、そのナガさこう火こつけでらず。してサルケですぐ火つぐだね。アレしたんで、ロブツだどごであまりおつきいどごで、割って細かぐして、してしてもりつとやって、そのナガさ。うん。すぐつぐだね。だんでこの辺でしたんでサルケ出だあだりだあ区画整理したあだりだ火つけば、けだどもてもまだ残ってる下さ、のごてるんだど（笑）。あらあ、ひとげりピ

ヨウブザン(屏風山)のほづで火事あたべ。な。原野の。けだどもたきやまだ燃えできたってな。ハハハハ(笑)。(このあたりで火事になったという話は) こごだりだばねや。こごだりでもぜーんぶあるだ。下。イズメートルも掘れば。全部ある。ジス(地震)来て、アレみたす、アレ、揺れの抑えになたもんだ。うん。

副産物 ▼サルケから出る煙の量は多かった。そのため、トラホームになることもあった。トラホームの流行状況を県の職員が調査に訪れたことを覚えている。濁酒を取り締まるために税務署の職員が来るときときには、サルケを多くくべて煙を大量に出した。「なんて煙たいんだ」と職員は我慢できず、家にあがることなく退散した。——「煙は野放しだ。ますぐ。してあのムガスくず屋根さあのムガシ、こうあでば屋根、こさハッポウだがて、煙ぬぎ付けだもだ。(煙は)出る出る。たんでムガシすたんで、ダグシュ作たず、酒かるジェンコねどごで、ダグシュつくたわけや。ダグシュつけだきや税務署でそれ調べにくだね。な。納屋の上さやてるどごで、ワラかぶへでしたて好きだふとあこだ、してこだまんだサゲになねだこだダグシュらあ、なねにむたかて見るどごでほんつけでまるだてな(笑)。ダグシュ調べにあてだきやムガシな。税務署で。わじゃにケムたで、いらいねであけむてしてな。わじゃに火焚いでそしてあたもんだ。なぼけむてえばってなも上がってらいねもや。我慢できねえで行ってまるでや(笑)。いぐいったなあっ(「うまく事が運んだなあ」)て。うう。それして、それしか楽しみねもんだもの(笑)。(煙のために)トラホーム。出だね。ムガシの人てや、いがに苦勞してきたがつごどな。今ひゃ機械でばりこやるたてみな労働力だきや。ろう、つかるいなあ。すに、たんだ結ぶでねだいね。いぷてしてこだ、トラホームはやってみな。こしてしすあ、煙がばどくてまるであな。ワンでも一回、オエのジジいぎでるどぎや、シバダのこの古しこえずいべ、県がらだ聞きに来てあたもな。うん。どういう状況だもんだが聞きにきてあつたねな。」

▼煙のニオイが染みついて、洗っても落ちなかった。サルケのニオイがする、とからかわれたという話を聞いたことがある。逆に、山から来ると木のニオイがするとも言われた。——「ニオイみなつぐ。煙ニオイ。して今だけにニオイ落どすものねし、センダグキってあるわけでねしな。ただ石鹸でぼしけんたあつかてらしあしあ。(サルケ臭いとバカにされたという話は)聞いたことある。サルケかまりすてな。うん、それだばな、なんだが『カマリがす』ってしたって。」「こちがら行けばサルケのニオイす、山がら来れば木のニオイすず、付ぐだでばな。木でもニオイ付ぐだね。アブラ出るもだもの。フフフ。」

▼サルケの灰を春まで蓄えておき、雪の上に撒いて融雪に利用した。——「(灰の利用は)あれあの灰、あの、ら、ユギ。消すためにまいだりした。けだばりでねぐな。ユギさまいで。(春まで)とておいで。マイニヂ焚ぐんだもんさ。アグアグってしたでばな。それさユギさ撒ぐば消えるだね。あらねづもづだも。」

その他 ▼キリッパ(サルケを掘った跡地)は、夏になるとサルケが腐ったような真っ赤な色の水が溜まっていた。そこで水浴びをした。フナ釣りもした。キリッパに住むフナは、骨が堅く頑丈で、小さいものから大きいもの(30cmほど)まで獲れた。赤い水のためかフナも赤い色をしていた。焼干しにして出汁をとるほか、串に刺して焼いて食べたり、ふなずしを作ったりした。すしは生臭みもなく、たいへん美味しかった。8~9月ころにはメスのフナには卵がぎっしりと詰まっていた。また、B氏の祖父がカモを飼育したことがあった。サルケがすみかとして快適なのだろうが、サルケにカモが入っていた。——「(キリッパでじゃっことったような話は)あるある。水浴びだりしたもんだね。なづ(夏)キリパの水てや、真っ赤だなてや、サルケのくきたんたもんでや、アガミズだずや。そのナガだんてのわんどきやみずてぺありたよ。てフナいるし、フナもつりし、とたし、そごもサルケどフナど、ふつこだでねだフナど、骨があづずかだいんだで、フナそのものもアゲわけ。染まてまてさ。こつのがフナますぐだべ。どうしてそなるもんだがよぐわがねばな。たんだいるもんでねえフナ。で網、キリパだどごで範囲ふえめきや。網ごどすぐればいば入ってくるだねろ。逃げばちよねもだもの。とて、食べだりすふともある。(私も)食べだよ。それ食べで、それでムガシ食うものねどごであだどごで、それ焼いで、乾燥さへで、そのフナで出汁とるの。すす(鮭)ついたりさ。ふなずしつきたの。たいしたおいしいだど。じょんずだふとあるだいな。おいしんだど。」(Aさん「なもなまぐせふねひてな。」「全然臭みねだてな。キリパてばこうおきい(30cmくらい)フナばりいでただももの。すぎずぎだもんだいまのつりだちどちがて、一本だきや。ながながあてくるでねだいろ(笑)。フナ鮭でだいたいフナやてば、フナのアレ揃えてるんたいな。おっきんどちせのど。アレ骨の違ってくるんだべおん。おきの骨かでどが、ながながしなねとがさ。」Aさん「ワ、オラしたて弁当だが何だがさつくて持てきたづ案外ちせひててあたんた感じすな。」「あまりおっきぐねんたね。」Aさん「もどのあの、ハダハダだのちゅんたもんでな。」「おっきんだばアレあな、出汁とったりすだ、焼いでな。クシさ刺して焼いで(そのまま食べたり)や。アギ、あれ何時ごろだべ。9月の、8月9月だな、(卵を)いっぺえもつちゅんだいな。フナいっぺはいてるんだ。だんでフナ、だんでしてさ、この幅ふれんず(幅の広いものが)がメスだずや。ほせんずオスだわけや。オスほしてふら、メス増えだね。」「それでおえのジコこだカモたてですさあ、そのサルケさこだカモ入る。」(2017年11月28日取材)

③ C氏 大正14年生(93歳) 男性

来歴 ▼大正14年に当地で生まれた。現在90歳。柴田集落の男性のなかでは最高齢である。往時のことを鮮明に記憶しており、非常にくわしく話して下さったうえ、サルケを掘った場所まで案内して下さい。C氏の父は明治22年生まれである。——「サラケのごとおおべでらづ、わ、最後だべえ。」「(私よりも年寄り)はもういない。わー、イチバン年寄りだ。うん。オドゴでな。オナゴでだば二人ばりあばて。」

呼称 ▼サラケ (サルケ)。商品としては、特に産地の名を冠してシバタジャラケ (柴田ザラケ) と称した。

使用年代 ▼昭和30年ころまで使用した。マキストーブの時代になってからは、殆ど使用することがなかった。——「んーだあなあ…昭和20、30年…30…30ぐれえめでだなあ。昭和30年あたりめでだな。」「(マキストーブでサラケを焚いたことは) したごども (そのようなことも) あったべども、そうやったもんでね。うん。(自身の家を含め) ほがのふともやんね。」

定義・分布・質 ▼当地のサルケは非常に質のよい「シバタジャラケ」(柴田さるけ) として知られており、その名は津軽一帯にひろく聞こえていた。板柳や鶴田へリンゴを買いに行ったとき、柴田から来たことを告げると「シバタジャラケはとていいですよ」と言われたという。——「シバダザラゲってやあ、まずシバダのサルケいいってただ。うん。いわあの、あらあ、こうあ、イダヤナギ (板柳) のほうのツルダだり (鶴田近辺) ばの、そなのアレ、うん、ほうのフトもや、シバダジャラゲってしてあった。あつさや、リンゴかに行ったどぎの。うん、『どごだあ』った (んで) 『シバダだあ』ってしたきやや、『シバダジャラケっていきやな』って言われだって。」「(売り買いする人は) あ、あたべねな。あた、あ、あ…かに来たふともあつたし売るにも行ったしすさ。うん。ワだぼうにいがねばてや。うん。まあ、主にかにきただ。うに、うにもいただでばの。うん。ワだばな (売りに行ったことはない)。(買いに来た人に売ったことは) それだばあるな。うん。アレだでばな、イダヤナギのほだの、までだば、イダヤナギのふとしゃべてあたはんでさ。リンゴかに行ったどぎな。シバダジャラケ、『シバダジャラケいきやな』って。おあのチヂオヤだぼうにいったべおん。うん。」

▼二種類のサルケがあった。草の根が多く含まれるものと、十分に炭化の進んだものである。燃料としては後者が良品であり、よく燃えるため、炊事にも用いられた。柴田のサラケは炭化が進んでいたため、とても良いものであった。前者は繊維質が豊富な見た目と違ってかえって燃え方がよくなかった。このように質的な違いを認識しているものの、呼称の別はなかった。——「草の根よげだやづだばや、よげえマイネね (かえってダメです)。うん。たんだあの、よぐツツ (土) ばり目にみえでも木、草の根うって入ってすちや、それ十分に炭化したやづだばや、いぐ燃えるもだね。うん。サルケばりて飯たがねんだ。うん。」「あどだば…まんだいいサラケだば燃えるもだね。んだんだあの、草の根、うってほどんと草の根のやづもあるしや、そしえ、まず、ゆぐえかわ、いぐなんねなんねだでばの、炭化しねえだだでばの。やづもあるしや、いぐ炭化してるやづとふたいろある…んだね。」「(それらのサルケの呼称は) ふとち (同じ)。「ほどんと…サラケばりだでばの。飯炊くづも何でもかんでも。うん。その他燃料ねだはんでしすあ。リンゴドゴ (リンゴの産地) だばリンゴのえんだ (枝) だが、山だばスギッパどがマツあだて、こづあそのほがなもねえだもの。うん。」「シバダあたりだば十分に炭化して、くわりよぐあてたでばの (火力がありましたよ)。(柴田のサラケは良いサラケだと) てえしたもんだんてあ。」

▼サラケは柴田から北西方向にある遠山里や、北東方向の稲垣方面まで分布しているが柴田よりも東のほうからはサラケが出ないと語る。そして柴田の北西方向の遠山里などに分布するサラケは品質が良くないともいう。柴田のサラケこそがもっともすぐれているという。——「サラケ焚ぐずも、シンバダ (柴田) がらあ、あ…林のほうかげでこぢ、そのむごだばや、サラケなんか出ねえだね。まあ…シンバダ (柴田) のふと、サラケ…採てみなうにいたはんでだべにの。ん…やトヤマ (遠山里) だのオダワラ (下遠山里小田原) だのあつの (あちらの：柴田からみて北西方向のムラを指す) サラケはや、あの…あ十分に炭化しねえ…いサラケであった、での。シバダあたりだば十分に炭化して、くわりよぐあてたでばの (火力がありましたよ)。(柴田のサラケは良いサラケだと) てえしたもんだんてあ。そのむごさ、シバダよりもむごさ行げばやあ、サラケ出ねえでい、うん。シバダがら…遠山 (遠山里) 萩野、イナガギ、イナギ (稲垣) のほうまであただてな。」「サルケ、まづ、これがらシゲシ (東) のほだのだばや、出ねえであったね。こごら北がら西さかげでししゃ、ブラグで言えば、遠山、萩野、林あたりめで、みな、そえがらだばイナガギのほだでばの。」

入手法 ▼自分の土地から採取した。昔は、サルケを柴田の人が売りに行ったり、逆に他の土地から買いに来たりす



サルケを保管していた場所 (屋敷裏)

ることがおこなわれた。後者の場合が多かった。明治22年生まれの子の時代であれば、売りに行ったのではないかと考えている。

採取の目的 ▼燃料の採取とともに、田地を低くするという目的もあった。——「て……主にしつあ、田…たがいはばかげにぐいはんでかがりにぐいはんでてやあ、ほぼの人な。」

採取の時期・場所・主体 ▼サラケは田から採取する場合と、ヤヅから採取する場合があった。前者ではまだ雪の残る4月の末、田植え前の時期におこなった。後者ではいつでも採取できた。——「んだなあ、田植えのめだでばの。うん。」「うん。春…したんで、ユギよげえで（たくさんあり）田植えのめ（前）だはんで…まあ、4月の末だでばの。」「（原野から採取する場合は）時期ねえ。」「原野の場合な。田がら採る場合は田植えの前にやねあまねはんですさ。」

▼C氏は家の裏手にある畑へと筆者を案内し、サラケを採取した場所と保管した場所を示した。それは屋敷からせいぜい10メートル程度の場所で、サラケを採取したために周囲よりもやや低くなっていた。現在はそこに豆類を植えている。畑の向こうには県道186号線が北西方向に走っているが、その周辺もサラケの採取場所であったという。——「うう。サルケな。ここあたりで…まあ、あったらばってや。今でもや、ああるだ……この下にな。うん。サルケだばや、この下にもあるだ。うう。掘ればあるだね。さ、へば聞きてえごど知らへろ。」「うと、そごのドロ（道路）あべ。あのあたり…がらもや、あこあたり田たげひて（低くて）あったあんでしさ、よぐ採ったもんだあ。」

▼採取する作業は男性がおこなった。C氏の場合、父親が切る作業をおこない、それを受けるなどの補助的な作業を手伝った。——「なも。オドゴばり。サラケ切るのだばオドゴふとりしてやるもんだえ。「んだ、（掘るのは）オドゴだ。」「サラケ、ワだばさねばてワのチヅ親きてしさ、ワ、テヅダイしたもんだ（笑）。」

採取法 ▼田から採取する場合には、表層の土を1尺5寸ほど取り除いてから、田の一边（およそ10メートル程度）の長さで、一列に掘り進んだ。幅はテンズギの幅に等しい1尺程度、一枚の厚みは6～7寸、深さ1尺5寸ほどにテンズギで切り込みを入れ、そのサラケ1枚分を足の甲に乗せるような感覚で、根元に足先を差し込むようにしながらテンズギの柄を手前に引くと、サラケ一枚分が手前に倒れた（図4）。つまり、根元部分は刃物を使わず、折り取るようなかたちで採取しているため、断面が不揃いである。そこで、いましがたサラケを掘り上げている溝の角に、不揃いの面を手前にしてサラケを上げたのち、専用のカマ状の道具を用いて、断面を切り揃えた。この作業を1列ごとに繰り返したが（図5）、田を低くしすぎてはいけなないので、田から採る場合には一

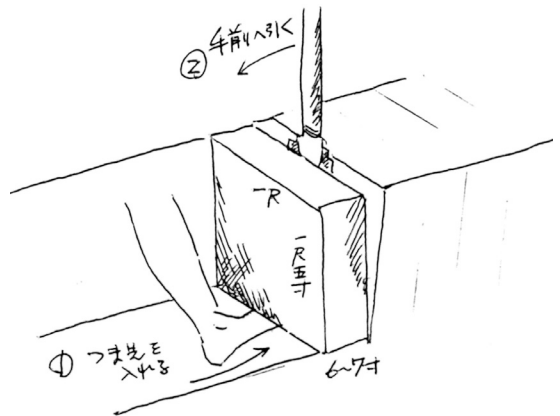


図4

一段分に留めた。ヤヅから採取する場合にも、表層の土を取り除いてから掘り採ったが、田のような配慮は不要なので2段分掘ることもあった。——「（田から採る場合には、上の土を1尺5寸ほど）投げで（捨てて）、あのすあ、このぐらいの幅でしさあ、掘ってぐ…してこのぐれえのあづみに掘ってしこのぐらいの、採って、それは田がら採る場合。上のツヅさ、はいで、じーっと（一列に）採っていぐの。（一列の長さは）田によってしすあ、たんでまあ…10メートルぐれえが。（つまり、長さは田の長さによる）うん。せがら、その場合ど、ヤヅって原野がら採る場合もある。原野がら採る場合だばや、もうんだでばの、こだ、上にいぐねツヅあるはんで、サラケになんねえずあるはんですちや、それもこのぐれえ投げですさ、してその場合は…このぐらいのヤヅ2めえ下さ採る場合もあるはんで。田の場合だばいぢめえずつ。あまり田ふけぐなてまるはんで。」「こうしさまず、掘る場合、田がら採る場合や、このぐらいのやづでしさ、このぐらいの…なんだがさてすだな、で採って、まあ、ふとこう歩ぐにいいぐらいのすさ、このぐらいの幅でずつと採って行って、それこうふとふつ田いぢめえぶんつてむご掘って、してまんだ戻ってきてまんだこちやこうって、3列ぐれえ…うん。んで、こう、こ採ってくるであ。こうこうごにフトいで、こつあこう採ってくる…へば、こう、さ。ずつとこう。この厚さみなしたんでログシン（6寸）がナナシン（7寸）だ。（縦に薄く切るような形で）ずつとこうな。うん。」「んだ、（掘るのは）オドゴだ。それせあ、テンズギってやあ。しもで…採ったもんだんだ。テンズギってせあ。このぐれえの幅でやあ、刃のほうな。で、カネのやづ、このぐれえのやづしさ、カネでこう作ってこれでこんだ木のい（柄）ついで、へて、採って、まだ、し、下までこう、い、ひょうほ（へばこう、の意）、足でこうしさ、踏みつけで、こちえこんだ、や、こごにあるづこう、サラケこう。足でこう（根元のほうに）、つ、そのつ（爪先を差し入れて、爪先で切れ目を入れると）、やっこえもんだんだサラケって。したんでこやてで。うーんてこや（サラケが倒れてくる）。うや、ほだ、こごさ足（の甲）さ、上げで、こんだちようど足でこう（爪先を差し入れて）やるもんだどごで、（切れ目がすっぱりといかず）ぐじゃぐじゃだしてろこれこれさ（サラケを切り取っている溝のそばに）あげで、ちゃんときて（きれいに根元部分を切り取って）それまだこちや上げで、

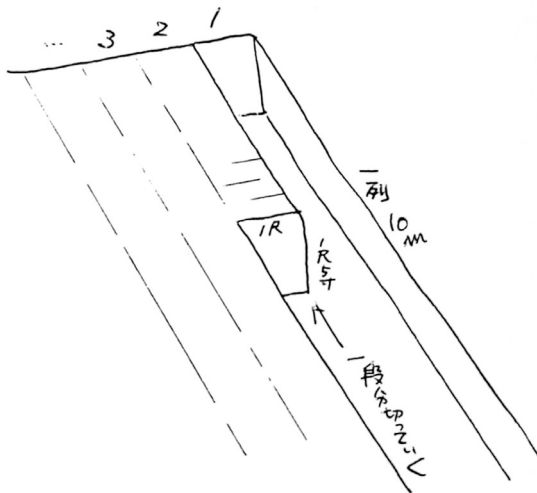


図5

でまんだめさ進んで行って、でまんだテズギで、こえてすさ、(上から切り込んで) うん。これこあくれえ[足でこう(切り込んだサラケの根元に爪先を入れて) やってこうやるべ、へば、それしやこんだこう(テズギを手前に傾けて) やるどごで、(切り込みの入ったサラケが手前に) 転んでくるでばし。それをこんだこちや(サラケを切っている溝の縁に) こう上げでえ、ほじやくちやに(足先で根元に切れ目を入れているので切れ目がぐちゃぐちゃになつたやぶこんだ、あの、カマ(鎌)だでばの。たんでこーう、(その部分をきれいに) 切つてさ。うん。してこんだ、こちやこうおいで、ずっとこう行って、こごへ1列こう行ってまれば、まだこちこだの、こう一行つてさ。してかあがして(乾かして) さ。」「そしてさあ、掘るときやあ、このぐらいで、て、このぐらいのしすあ、で、厚ささあ、6寸ぐらいの厚みでよお、まあ、1尺で1尺5寸ぐれえだな。で…、掘つてすあ、うんと、オラやつ

たどぎだばすあ、田あるでばな、田の下さ、このぐらい、上掘つて、その下にろうあるわけや。(上の土をまず) とりけでえ、そ…したささあ、このぐらいの…まんず、このぐらいさ、で、6寸が7寸ぐらいの厚みで、こ、とてあげるわけや。」

▼テズギやサルケ専用のカマ状の道具は、となりムラの中館の農鍛冶に作ってもらった。4～5年ほど前までは、テズギを蔵に保管していた。「もったいなくてね。残しておきたかったけれども、息子が捨ててしまった」と残念そうに語った。——「4～5年先にだばよお、そのテズギってしさモノあつてあた、蔵にあてあただばて今ねえにな。(処分して) うん。ワだば、いであして、のごしておぐんだつておえの、お父さん(息子)がなげでまつた。」「(テズギのほかにタヂは) ああーなも(使わない。」「その(サルケを切る)カマしさ、ふいらたいもんだんだ。カマど同じよだばつて、このぐれえ、のあづみでや。あ、幅でや、あづみあうしい(薄い)ばてや。こう、ヒラ、ヒラ、こう丸みねえただバダ、ベタラっどこう平たいもんでや。うん。んだんだ。サルケ用の。」「(道具は) うん。カジヤさ(頼んで) な。カジヤな。カジヤ、ナガダデ(木造中館)にしつあ。うん。」

乾燥・運搬・保管 ▼一枚ずつ並べて20日から1ヶ月ほど乾燥させ、乾燥が進んだところに3～5枚分の高さのレンガ積みにして更に乾燥させた。サラケのブロックとブロックの間は開けずにぴったりと付けたという。そのような状態で、トータル2～3ヶ月ほど干すが、途中で一度ひっくり返した。——「最初しすあたんだこうなつたづーつと、切つたまま並べでつて、して、20日も一ヶ月もあれば、軽くなるはんで、ひてこんだあワキパラさちゃんど並べで。うん。」「そして、それ(田からとつたサルケを) こんだ最初すつあ、1めづづーつとこう並べですすあ、干して、たげ乾いでがらだばこだ、3枚ぐれこう、重ねで、で干して。」「でそれ(掘つたもの)を、…んだなあ。2がけつぱり干して、がら焚ぐわけ。」「まあ、5段ぐれえこうすさ、たげ乾いでがらだどごで、5段ぐれえこう並べで。(積み方は) 互い違いだでばの。(間を開けずに) ビッタど付けで。してずーつとあちまでし、や、やつて。」「んだなあ、3がげつも乾がすべおん。んでねば燃やさえねえはんでしさ。(その間) 一回だばとくらがして(ひっくり返して) おぐな。」「ほしてずとこう、きてまつてえ、そえを…そえこんだあ、なんぼがナマ乾ぎになればこんだ、田とりけねあまねはんで、ワキパラさこうチャックど並べで、干してしすあ。」

▼サルケを切る作業は男性が中心になっておこなった。乾燥時の返しや乾燥後の運搬は、同様に主として男性の作業だったが、女性もおこなった。乾燥したサラケを5枚一束とし、カナグルマに載せて馬に曳かせた。自宅裏手の、畑と屋敷地との境界あたりにサルケを積み、ノマをかけて保管した。C氏が最後にサラケを採取したのは昭和30年代前半で、その後はサラケを半ば放置していた。50年以上もの間、野ざらしに近い状態にあったため、知らぬ間に朽ち果てて跡形もなくなっていた。しかし、筆者が訪れた当日、C氏は実際にそれを目にするまで、父親と積んだ最後のサラケが、その時のすがたをいまも留めていると考えて疑わずにいた。サラケの現物を見せてやろうと、筆者をその場所まで案内してくれたのである。——「まんずせあ、乾いが、乾いだヤツ、5めえぐれえナワでからげで、ひてこんだあクルマさつてえ、うん。カナグルマ。馬車のな。もど、ゴマア(ゴム)のクルマねへてあつたはんでさ。マさ(曳かせて)な。」「(家へ運搬したあとは) だんでさきたさべた、あつ(自宅の北側、現在豆を植えているあたりの脇)さ。ノマかげでおいで。(使用するときには、そこから家に持って来る。))」「サルケな。…ううん、サルケつて…どらあ、ツヅがらやあ、まあいいしや、こにいなが。サルケ…ちよつと来てみなが。あるがもわがらねし…なげでおいだつきゃあ…。あつてだばつて、(枯れ草の山をかきわけて探すものの、当時採掘したものは野ざらしで朽ち果てて跡形もなくなっていた) わがらね。このあだりにすあ、あただね。」「(運搬や乾燥の仕事は) オドゴでも女でも。主にオドゴだね。ツカラシゴドだはんでしちや。」

用途 ▼サルケは採暖だけではなく、湯沸かしや炊事にも用いられた。炊事の際にはサルケの量を多くし他の燃料を併用することで火力を上げた。灰は利用しなかった。——「ほどんと…サルケばりだでばの。飯炊ぐずも何でもかんでも。うん。その他燃料ねだはんでしすあ。リンゴドゴだばリンゴのえんだどが、山だばスギッパどがマヅあだて、こづあそのほがなもねえだもの。うん。」「(炊事の際にはサルケの量を) まあ、よげえにしねあなんねでばの。ボウボウど…まんだせあ、いいぐ燃えるもんだね。うん。」「うん。(サルケで炊飯するとはいえ) サルケばりで飯たがねんだ。うん。」「サルケ、火焚ぐ、飯たいだり、湯わがしたり、そえんたもんだでば、そのほがだばなも。アグ、ただなげるばりだでばの。なも使いようねもの。」

操作 ▼シボド(囲炉)にくべる際には、サルケをナタで小切りした。サルケには(木と同じように)目がある。目に沿って切るときれいに割れるが、逆だとよく割れないという。——「割ってしき。まんずあ、こんきぐらいさしてさ。(レンガの大ききくらい) んだんだ。(細かく切る道具は) なんだ(鉈)。アレまんだせあ、目あてやあ、うん。こうあれば、いいし、それギャグにやればすせああまりいぐねえでばの。」

▼着火時には、まず木片を燃やした上でその上にサルケを乗せて着火した。最初は煙が出るが徐々におさまった。一度火が付くと、順次別のサルケを継ぎ足して火を維持した。——「えさ来て焚ぐだでばの。何だば、コッパ、うん。コッパ燃やして、それさ、サルケやってちゃ。(着火後しばらく経つと) うー、い、そう、けむてぐねもんだね。最初けむてあばって、ひでもなんぼがだばけむてえばってな。火つでまればやあ、あの…燃えてまればこだ、こちのやつあまだ、燃え、ほや、あの、あつぐして燃やすはんでや。うん。」

副産物 ▼煙がひどかった。そのため、トラホームになる者が多かったとC氏は考えている。——「…いんぷてや。たんだでねえもんだね。だんでトラホームいっぺであつたでばの。(とにかく) けぷてえごどばりだでばな。」

▼また、よくないニオイがした。町(木造中心部)の人たちは『サルケくさいニオイがする』と言った。あるとき、永田の人が町の商店から品物を購入したが、不良品だったので返品しに行った。すると、一度家に持って帰ったものならサルケ臭くなっているからと断られた。その人の家では実際にはサルケを焚いていなかったのだが、言いがかりを受けたという。——「いぐねえね。たんでそれさしすあ、煙るどごで、トラホームよげえ、あつたもんだ。うん。マヅの人だばや、『サルケクセえかまりす』ってな。」「ワだば(サルケ臭いと) さべらえだごどねえばってや。あら、…ナガダ(永田)のふとや、アレだど。キンヅグリ(木造)のや、めへやがら商店がら、モノ買って、いぐねひえてあつたどごで、もんどしに行つたど。したきや、一旦ええさ持つてつたもんだきやまいね、サルケくせぐなつてまつて、しすあ。ほいなあ…そのふとあ、さ…ああオレ(私の家)でだつきえあサルケなも焚いでねあだあ、オイ(私の家)でだつきやシミ(炭)ばり焚いであだあつて、したたてなあ、サルケくせひてまねつてしたたてな。キンヅグリ(木造)の人な。」

その他 ▼ある小作人が、借りている田からサルケを掘りたいので一策を講じ、「田が高く湛水しにくいから、低くしたい」と金木に住む地主に願い出て許しを得た。田を低くするというのは口実で、実際はサルケを掘るわけだから、必要以上に低くなってしまふ。無知な地主が気づいて怒ってもあとのまつり。そのような笑い話があつたという。したたかな生きざまがうかがえるエピソードだ。——「でこんだあ、田こんきぐれえ(一尺5寸くらい)下げるにしすあ、たがさな。このぐらい、下げるもんだ、下げるにろ。ホントにたげえばあ…そうすし、こだあ、まんず、小作してるフトあつきやあ。小作してるフト自分の田でねしサルケほししすあ、でこんだあ、ダンナさ、田たがいひい水かげらいねえはんでつてへば、ダンナなも知らねえに、でこんだサルケ採つてしすあ、サルケ、たげたて、田たげたたてやあ、水かがりにぐいたたて、こんきがあナンボ、たげして水かがりにぐいてこだ、採れば1シャグも掘らさてまるだはんで、1シャグな。だどごでこだ、(笑)、そのあづほでイガル(怒る)だでばな。こづいで(笑)。そしたフトあたや。金木のほの…ダンナなも知らねどごでししやモノつて(笑)。サルケだきやこの下にもあだ。」

原野(湿地)から掘り採つた場合、その跡地のことを「キリッパ」と称した。「田の場合は田だしや、原野の場合はキリッパだでばの。だんで、原野の場合は水溜まりだでばの。キリッパつてした。(原野というのは) ヤヂ。…ヤヂ。」(2017年9月3日取材)

④ D氏 昭和9年生(84歳) 男性

来歴 ▼昭和9年生まれ。当地で生まれ育つた。

呼称 ▼サルケと称した。

使用年代 ▼D氏が小学2～3年生のころ、つまり昭和19～20年ころまで、サルケを採取していたという。D氏が中学生のころ、つまり昭和22～25年ころまでサルケを焚いていたとも記憶している。——「ムガシ?おあらワー今の人だどごでムガシのごどわがねだねな。サルケ?サルケそうそうサルケ。うう、田んぼのほう。田んぼのじつとうん。掘つた掘つた。あーれオラダツァナンボだ、やっぱり、小学校、小学校のあだりだべな。9年生まれだはんで…へば、19年が20年のあだり、その、ちょっと前だべな。アレやっぱり(小学校)5～6年のあだりでねえぎやなあ。のあだ